

# 変わって行くこと 変わらないうこと ～幼稚園からごども園へ～

石矢友里

私には、まさに「保育ノート」がある。もう何冊目になるだろう。新卒のころからこれまで五年の間ずっと、欠かさず持っている。好きなキャラクターのもので、B6かA6サイズのリングノートというのが私のこだわり。

ノートの中身はというと……新学期に準備すること、週日案をもっと詳しくした自分だけのメモ、来週の予定、やらなければならぬことのリスト、研修会や研究発表の時の講師の先生のお話、訪問指導での助言、保育中にふと子どもが口にした面白い一言、最近のあの子の気になる姿……とにかく何でも書いてある。大事なことをコロッと忘れ

てしまうことのないように、ふとひらめいたことを後でじっくり考えられるように。そして、書くことで頭の中が整理できるように。そんなふうにしてきたら、いつの間にか、保育者としてのこれまでの私の歴史になった。ある研修会に参加した時のページに、「どんなに一生懸命にメモを取っても、しばらくしたら忘れてしまうもの。聞いて覚えているものだけが心に残る」という講師の先生のお話がメモしてあって、自分で笑ってしまった。

だから保育室のピアノの上などに、このノートをポンと置き忘れてしまった時の私は、不安でた

まらない。「どこ行っちゃったんだろう。えーっと……さつき書いて、それから……」と記憶をたどり、園内じゅうをぐるぐる歩いている。他の先生方にも、「私の小さいノート、どこかで見たら教えてください」と言ってる。そして見つかった時のうれしさといったらない！ 保育ノートは、自分のパートナーのようなものだ。

この愛すべき私のノートたち。それぞれタイトルが付けられるくらい、ドラマチックな保育生活だったと思う。この原稿を書く機会をいただき、以前のノートを久しぶりに開いてみた。

**なりたかった幼稚園の先生に！**

**……でもわからないことだらけ**

公立としては伝統のある幼稚園で、二年保育の四歳児担任になった。今思い出すと、深い穴を掘って入ってしまいたいほど恥ずかしいことばかりだった。新卒なら誰でも……と思うかもしれない

が、自分のこととなれば、そんなことは言っていられない。周りは大先輩ばかりで、わからないことも「わからない」と言えないまま、毎日が過ぎていった。一週間が長かった。私のノートは、いつも、消化し切れなくらいの、やることリストでいっぱいだった。保育雑誌で見たことや隣のクラスでしていたことをとにかくやってみた。そして落ち込んで、反省して、「明日はどうしよう」と考えているうちに、次の日が来る。それでも、「友里先生！」と呼んでくれる子どもたちが、心からいとおしかった。保護者の方には、子どもたちと一緒に、私も育ててもらっていたと思う。

**初めての年長組担任！ え……？ 私だけ？**

何の巡り合わせなのか、昨年までの教師は、私以外全員代わってしまった。一年目の最後に、職場を去る先生から「伝統なんて気にしないでいいからね。新しいメンバーで、新しくつくっていい

「はいんだよ」と言ってもらったことをいつも思い出していた。持ち上がりで五歳児の担任になり、「何で昨年の年長組のことを、もっとよく見ておかなかつたんだろう」「いろいろな場面で、先生方にたくさんフォローしてもらっていたんだ」と初めて気がついた。

保育後に、先輩の先生方とお茶を飲みながら、子どもたちの話をたくさんした。そうするうちに、だんだんと、自分や子どもの失敗、どうしようもないような姿も肯定的にとらえることができるようになった。何だか毎日が楽しくなっていた。初めて担任した子どもたちの修了式は、胸がいっぱいで、言葉にならなかった。

**まさかの異動！ たった六人の年長組担任に。**

**そしてこども園!?**

学級減のため、三年目にして異動することになった。異動先は、大都会の真ん中の幼稚園。全園児で二十名弱しかない。「異動は最大の研修

だから、頑張つて」という前職場の先生の言葉を胸に、新しい職場へ向かう。はじめの二日間くらいはホームシックのような気持ちだったが、何ともユニークな六人の年長組と温かい先生方のお陰で、密度の濃い充実した一年間を過ごした。もちろん、少人数学級で教師の存在が大きくなり過ぎてしまうなど学級経営の難しさもあった。しかし、日ごろから異年齢での遊びや活動を取り入れるなど、少人数の幼稚園ならではの面白さがあった。一人ひとりの言動からじっくり思いを探ったり、子ども同士のつながりの深さを感じたりすることができた。そして私自身、二回目の年長組担任だったことで、少し見通しをもつことができた。

そこは、二年後に近隣の保育所と統合され、「こども園」になることが決定されていた。こども園は、すでに同じ区内にあり、研修で行ったことはあるものの「こども園」というものをまさか自分が体験するとは思っていなかった。園舎を新設するため、小学校の教室が仮園舎になった。幼稚

園の職員室になったのは、障子や押入れのある、小学校の和室だったというのも最初で最後の経験だと思う。

前年度まで使われていた幼稚園は徐々に解体され、更地になり、新たに鉄骨が組まれていった。三歳・四歳の時代を、解体される前の園舎で過ごしていた年長児たちは、それを見てポツリと言、「何か、思い出が壊れていくみたい」。その年から来た私でさえ、園舎から園章のエンブレムが外されるのを見て、胸がギュツとなった。

そして、こども園化プロジェクトチーム、通称PTにも参加することになった。園長、校長、役所の職員、既存のこども園の先生など偉い人ばかりの中、保育時間などさまざまな話を話し合いながら決めていった。私には難しいことばかりで、意見を言うよりも、「へえ、そうなのか」と話を聞くばかり。教育の観点からだとこうだけど、サービスの低下になるって言われると……など、考

えさせられることも多かった。

### 初めての三歳児担任。

#### 幼稚園の閉園と、こども園開園準備

いよいよ幼稚園最後の年。何をするにも、幼稚園としては、これで最後だった。すべてに全力で笑ったり怒ったり泣いたりする三歳児との初めての生活は、面白くて仕方がなかった。ノートには、三歳児ならではの名言（迷言！）が増えた。一つの教室をパーテーションで分け、隣の四歳児と銭湯のように筒抜け状態だった仮園舎の保育室も、なぜか居心地が良かった。

来年度になったら歌えなくなってしまう、幼稚園の園歌。ピアノの伴奏は難しかったけれど、明るい掛け声の入った曲は大好きだった。その園歌の記念CDを作るために、全園児（といっても約二十名）と職員でレコーディングに行った。CDのレコーディングなんて初めてで、子どもも私も

ワクワクした。そして閉園式。歴代の職員や子どもたち、保護者が集まった。みんな幼稚園が大好きだった。それがわかって、思いの深さを感じた。

こども園化に向けての打ち合わせ内容も、だんだん具体的になってきた。各学年、幼稚園・保育所から一人ずつ出て、指導計画の作成。カタログから、遊具や棚などの用品選び。指導計画のねらいや内容の文言を話し合う時よりも、遊具や用品を選ぶ時のほうが、意外と、遊びや保育観の違いに気付いた。チーム保育（一学級を、保育士と幼稚園教諭の二人で担任することになっていた）でやっていけるのだろうかと不安にもなった。

三月の修了式、終業式を終えると、新園舎への引越しまっしぐら。ここに幼稚園があったことが夢だったかのような勢いで、保育室や職員室は段ボールで埋まっっていく。とてもアットホームだった二つ目の幼稚園。今思うと、こども園一年目は、この年にためたエネルギーで頑張れたのかもかもしれない。

### こども園が始まった！

一学期は、何が何だかわからないまま、どんどん進んでいった。まず、勤務がシフト制になり、自分の学級の子どもが登園しているのに担任である自分がいないという状況や、子どもが遊んでいるのに自分は休憩に入るということを受け入れなければならなかった。送り迎えの時間が人によって違うので、毎日顔を合わせない保護者がいるようになった。何と！ 日によって、一歳児や二歳児の小さな子を担当するようになった。とにかくわからないことが多すぎて、まるで一年目の新卒に戻ったような気持ち。毎日持ち歩いている保育ノートには、連絡事項を書くことが増えたように思う。本当は、もっと、子どものかわいい一言や遊びの様子を書きたいのに、目まぐるし過ぎて、連絡や報告事項など、必要最低限のことを忘れないようにするのに必死だったのだ。

そして、保育士の先生と二人で、パワフルで個

性豊かな五歳児の担任をもった。はじめは元幼稚園メンバーと元保育園メンバーで分かれて遊ぶことが多かったが、いつの間にか分け隔てなく一緒に遊ぶようになっていった。短時間・中時間・長時間と一人ひとり保育時間が違うことや、同じ場に給食を食べる子と弁当を食べる子がいることも、「Aくん、今日帰るの何時？ ぼく三時！」「Bちゃんのお弁当かわいいね！」と、大人が心配するより子どものほうが柔軟に受け入れていく。子どもの適応能力って、本当にすごい！

正直に言えば、いろいろな保育者と話し合ったり実際に保育をしたりする中で、消化不良でモヤモヤとすること、違和感を感じることもある。でもそれは、「なぜ私は今、そのように感じているのだろう」「どうして私は、それを大切だと思っているのだろうか」「子どもにとっては……？」と、自分の思いや考えを見つめ直すきっかけにもなった。そうする中で、「ああ、こういう考え方もあるんだ」

「こういうやり方もあるんだ」「やっぱり大切にしたいのはココだ」などと、自分なりに気付くことができた。

たった五年のキャリアだけでも、驚くほど毎年、そして日々新しいことが起こる。その中で、子どもたちはどんどん成長していくし、いろいろな人や環境の影響を受けて、私自身も変わっていく。周りも変わっていく。しかし、こども園で働くようになって、こんなにさまざまなことが変わっても、支えてくれる人や心に残る言葉、何よりかわい子子どもたちがいることは、変わらないんだと思った。

数えてみると、十六冊目の保育ノート。今使っているノートも、もう少しでなくなりそうだ。次は、どんなノートにしようかな。新しいノートにはどんなことが書かれていくのかな。きつと私は、ワクワクした気持ちで、次のノートを選ぶ。

(東京都新宿区認定こども園)